

新潟県立近代美術館便り

# 雪 椿 通 信

NOM



第4号

1995.4

# 平成6年度 新収蔵品

## 《世界の美術》

### 版画

- ◆アルブレヒト・デューラー  
《黙示録》  
1498年(表紙のみ1511年)  
木版画 連作16点(内表紙1点)

世界の滅亡と最後の審判が予言されていた各世紀末には、予言の出典である新約聖書末尾の「黙示録」に強い関心が集まり、装飾写本や木版挿絵本等が作られました。この作品も15世紀末に制作、刊行されました。この作品により、当時27才の若いデューラーは、高い芸術性と優れた木版技法によって空前絶後の成功を収め、一躍全欧最大の木版画家と見なされるようになりました。

また、この版画は当時の各国の画家にとって大きなモチーフ源となり、巨匠たちによってさまざまな借用が行なわれています。



第6図 《騎馬を吹く七位の天使》

- ◆ヤーコポ・デ・バルバリ  
《ヴェネツィア鳥瞰図(第3版)》  
1500年  
木版画(版木6枚 刷紙12枚)

当時ヴェネツィアで活躍していた布地商アントン・コルプがヴェネツィア政府の特許を得て刊行した。現在、本作品を入れて25部が残存しています。

約500m上空からの鳥瞰図に仕上がった本図は、上縁に描かれたアルプス連山が極めて正確に描かれ、市中の主要な建物にはその名が記されています。

6枚の版木を用い、各版本2枚ずつで刷った計12枚の紙画を組み合わせた大画面は、地図であることを超えた芸術性を持った大変珍しいものです。



## 《日本の美術》

### 洋画

- ◆中村 葬  
《洲崎義郎氏の肖像》  
1919年  
油彩・キャンバス

モデルの洲崎義郎氏は、昭和30年代終わりから二期柏崎市長を務めた人物で、葬との初対面で百年の知己のように共鳴し生涯の

友となったといわれます。彼は天涯孤獨の身であった葬に対し、作品の購入をはじめ惜しみない援助を続けました。



この作品は、葬が洲崎氏のエジプト彫刻のような顔の構造に興味を感じて制作されたものです。作品は大正9年11月、洲崎氏の尽力で柏崎で開催された葬の初の個展の会場に展示されました。壮年の意気と生気を見事に描いた秀作です。

## 《新潟の美術》

### 日本画

- ◆村山 径 《閑》  
1970年 紙本着彩
- ◆村山 径 《浅春》  
1983年 紙本着彩

### 洋画

- ◆福岡奉彦 《羽音》  
1993年 油彩・キャンバス

- ◆福岡奉彦 《海と鳥》  
1991年 油彩・キャンバス
- ◆富岡惣一郎  
《イベントナー氷河 マッキンレー山脈》  
1987年 油彩・キャンバス
- ◆富岡惣一郎 《北の海 流水》  
1985年 油彩・キャンバス
- ◆荒井一郎 《山川の春》  
1962年 油彩・キャンバス
- ◆荒井一郎 《母と子》

- 1950年 油彩・キャンバス

### デザイン

- ◆亀倉雄策 ポスター(全31点)  
1992~1994年

### 写真

- ◆牛腸茂雄  
《SELF AND OTHERS》  
(組写真59点+資料2点) 1977年  
モノクローム・プリント パネル仕立て

### 資料

- ◆土田麦徳  
書簡・葉書 明治末年~昭和7年  
封書入り書簡47通/封書なし書簡6通/葉書15通/売り立て目録1部  
関真次郎氏は加茂市で機織屋を営

んでいた人で、土田麦徳のパトロンとして屏風《海女》などの作品を購入し支援した人物ですが、これは麦徳が彼に宛てた書簡と葉書です。

書簡には展覧会出品作、小野竹喬の作品斡旋や黒田重太郎の新潟での画会開催等の内容が書かれてお

り、葉書には麦徳が外遊先(欧州)から出したものも含まれ、当時の麦徳の動向を知ることができます。書簡も葉書も麦徳と関氏との関係、また麦徳と郷里の関氏を知る上でも貴重な資料で、これにより、麦徳の研究が一層進むことが期待されます。

# 「ヨーロッパ工芸新世紀展」素材への挑戦・手技の復活

A NEW CENTURY IN EUROPEAN DESIGN

その作品について

“A NEW CENTURY IN EUROPEAN DESIGN”これが今回の「ヨーロッパ工芸新世紀展」の欧文タイトルである。英語に詳しい方なら不思議に思うに違いない。なぜ「工芸」の直訳に相應しい“CRAFT”ではなく“DESIGN”なのか。このことは、今回の展覧会がデザインの文脈から観るべきものであることを表している。

イギリスのアーツ・アンド・クラフツやフランスのール・ヌヴォーなど世紀末から華やかに展開したデザインの歴史は、ドイツに始まる世界で初めてのデザイン学校バウハウスの登場とともに、機能性、合理性を重視した近代デザインへ移行する。これが、やがてモダニズムの運動となって、世界を席卷していくことになる。こういった時代への批判として、ポストモダンが叫ばれるようになったが、明確な答えはいまだ出てはいない。今回の展覧会はそういった時代への工芸作家からのひとつの回答となっている。そして、その方向性は多種多様な素材や技法、作家それぞれの制作意図、国籍、人種に至るその全てが異なっている中で唯一の共通項である、自らの「手」への極端なこだわりをみることが出来る。一般的な工芸技法を用いる作家は無論としても、ドローイングにコンピューターを用いたり、既成のガラス板を使用しながら、最後には必ず自らの手を使用する。それも、単なる仕上げということではなく、自らの作品のかなりの部分に自らの手を関与させ、作品を最後まで自己の管理下に置こうとする明確な意思表示でもある。これは、いわゆる「現代美術」がその推移の過程のある時点で、自らのヴィジョンをより完全に表現するために、作品の一部、あるいは全てを発注することとはまさに逆の発想である。その結果、これらの作品は極めて大量生産のしにくい、かつ決して扱



グルトラウド・メーヴァルト 《直立する手》 1992年  
作家蔵



ダニー・レイン 《木こりとその影》 1993年  
作家蔵

やすいとは言えない異様なものとなったのだ。しかし、その見慣れない姿に反してこれらの作品の多くは間違いなく親しみやすく、そして優しい。それは彼らが希薄になってしまった作家と素材、あるいは材料といった両者の関係を再び取り戻そうとしていることに起因する。ただ、ここで重要な点は作家は過去の郷愁に回帰しようとしているわけではなく、また単なる自然との関わりを求めているわけではないということである。自然もまた時代の時々で変貌を遂げていく。伝統に追随し社会と関係なく単に現状を維持することは、現在の自然を無視した行為に等しい。特にヨーロッパの作家にとっては、1980年代末から現在に至る激動の変化、東西ドイツの統合、ロシア崩壊などを目のあたりにしており、作家の眼は新たな「自然」=膨大な情報が行き交い絶えず変貌を続ける「都市」へと向けられているのである。

さらに、次世代の工芸が工業デザインに迎合することなく、それによって工業デザインに溢れた都市と調和すること、その重要性にヨーロッパの作家たちはすでに気付き始めている。そのことを作品は主張している。

# 子どものための美術展 美術の光・光の美術

## 美術館へようこそ 今度の主役は、子どもたち



ヒカリ先生



ライトくん



図1 図録 《レインボー・ディナー・セット》 1988年-89年 広島市現代美術館蔵



図2 テオドール・ルソー 《樹のある風景》 1840年後半-50年前半 山梨県立美術館蔵

美術館へようこそ  
わたしはヒカリ先生。  
今日はみんなを  
楽しい展覧会にあなないしよう。

ほくの名前はライト。  
ほくといっしょに美術と光のひみつ  
をさぐりにいこう。  
いったいどんな作品があるのかな。

それは見てのお楽しみ。  
気がついたことやわからないことが  
あつたら、どんどん先生に話してご  
らん。  
きついろいろな発見が生まれてお  
もしろくなってくるよ。

なんだかワクワクしてきたぞ。  
さあ、みんなで光の世界に出発しよ  
う。

ヒカリ先生とライトくんのこんな  
対話でこの展覧会は始まる。

各コーナーでヒカリ先生はライト  
くんに問いかけたり、説明をする。  
ライトくんは、子どもたちの仲間。  
ヒカリ先生は、ガイド役である。子  
どもたちが、このライトくんのように  
驚いたり、気付いたり、疑問を持  
ったりしながら、楽しく、親しみをも  
って作品を鑑賞し、色々なことを  
学んでほしいという願いからこの展  
覧会が企画された。

そのためにこの展覧会にはいくつ  
かの特色がある。一つ目は、徹底し  
て子どもたちの目線に降りていくこ  
うことである。展示の高さはもちろん、  
解説パネルの内容や文字の大き  
さまで、子ども仕様にする。二つ  
目は、体験活動を取り入れること。  
鑑賞補助展示として、各種の遊具を  
用意し、自分で操作し、体験するこ  
とで鑑賞学習がより確かなものにな  
るように意図している。

今回の展覧会のテーマは、「光」  
である。光は、子どもたちの身近に  
あり、しかも美術の表現上重要な意  
味を持つものである。しかし、美術  
教育では、表現活動をはじめ、鑑賞  
学習においても、表現の主題や鑑賞  
テーマとして扱われることは少ない  
ようである。

美術で扱われる様々な光のなか  
から本展では、「虹色の世界」、「朝焼け  
・夕焼け」、「太陽を描く」、「光をもと  
めて」、「明るい・暗い」、「かげの不思議」、  
「白のマジック」、「光の錯覚」、  
「写真の中の光」、「光とガラス」、「光  
がうつる」、「ライトアートの宇宙」  
という12のコーナーを設け、作品と  
解説パネルや遊具により構成する。

### 虹色の世界

光をプリズムによって分光し、虹  
を作り出す。また虹色を使って描か  
れた競馬の作品を紹介する。

(図版1)



図3 高島野十郎 (秋楓) 制作年不詳  
福岡県立美術館蔵



図4 トマ・クチュール (セリ・グールへの肖像) 1850年頃  
山梨県立美術館蔵



図5 ジョルジョ・デ・キリコ (ヘクトールとアンドロマケの別れ) 1918年  
大原美術館蔵



図6 田中健一 (LUMINOUS-ルミナス) 1994年  
作家蔵

### 朝焼け・夕焼け

子どもたちは、夕焼けの美しさを体験的に知っている。また童謡「赤トンボ」を歌いながらその子なりの夕焼けの情景を思い浮かべることもできるだろう。美術の世界にも朝焼け夕焼けを描いた作品は数多くある。夕焼け・朝焼けが見える仕組みに気付かせながら作品を鑑賞する。(図版2)

#### 太陽を描く

光といえば太陽を連想するほどであるが、古代から人々は、数え切れないほど太陽を描いてきた。また幼児期に、絵の中に太陽を描くことは誰でも経験のあることである。ここでは、太陽を描いた数々の作品を紹介する。(図版3)

#### 光をもとめて

光を追い求めた印象派の画家たち。ここでは、モネの作品を中心に紹介する。

### 明るい・暗い

人物に当たる光の方向で表情が変わったり、画面に光を描くことで、神秘的な情景を表した作品を紹介する。(図版5)

その他「白のマジック」では、スーパーリアリズムの作品を、「光の錯覚」では、キネティックアートを紹介し、「ライトアートの宇宙」ではレーザー光線やネオン管を使った大作を展示する。(図版6)

子ども向けの教育普及展が、各地の美術館で企画されるようになって10年以上になる。主に1館単独で企画され毎年夏休みや冬休みの期間継続して行なわれている例が多く見られる。これは企画内容において館独自の特色が出せる強みがあるが、所蔵品を主にすることによる限界もあった。今回の子どものための美術展は、北海道立近代美術館、福島県立

美術館、山梨県立美術館、広島市現代美術館、新潟県立近代美術館の5館の共同企画によって行う全国でも初めての展覧会である。館の独自性を尊重しながら、各館の教育普及担当学芸員がそれまで蓄えたものを出し合い企画を練りあげた。そのため、展示する作品も各コーナーに相応しいものが集まり、遊具もアイデアを精選して作られた。図録も子どもが楽しく読みながら鑑賞できる内容になっている。

「子どものための」とあえて名付けたこの展覧会がきっかけとなり、子どもたちが美術館に気軽に通ってくれたらと願っている。

(主任学芸員 宮崎俊英)

# フランスからの便り

—自治省・地方公務員在外研修プログラムの適用を受けて—

美術学芸員 佐々木 奈美子

まだ薄暗い坂道を、美術館に向か  
って急ぐ。冬の陽は短く、8:30に  
なろうとしているのに、今ようやく  
夜が明けるところだ。吐く息が白い。  
乾いた石畳から、しんと足に冷  
気が伝わってくる。ふと、雪の積っ  
た翌日の長岡の朝を思い出す。陽光  
をこんもりと照り返していたその白  
さと、今歩いている街並の陰った暗  
い色合いとはなんと違っていること  
であろうか。ただ遅刻しそうになっ  
て慌てている自分だけが変わらない。

家から10分程歩き、ある角を曲が  
ると急に視界が開け、そして「ブリ  
ウレ」という名の美術館と、背後に  
広がる家屋の連なりとが目にとびこ  
んてくる。坂道から見下ろす眺めな  
ので、地平線が高い。もし運と天気  
が悪くなければ、ここからの朝霧や  
夕暮は夢のように美しく見える。

「ブリウレ」は別名をモーリス・  
ドニ美術館といい、新潟県近美と同  
様に「県立」の美術館である。(写  
真図版)名称の通り遺族から寄贈さ  
れたドニの絵画と資料を中心に、ナ  
ビ派の作品が多数所蔵されている。  
その中にはポール＝エリー・ランソ  
ンがサミュエル・ピングの「アール  
ヌーヴォーの館」の食堂のために制  
作した連作《仕事をする女性たち  
(1895)》の内の3枚も含まれている。  
同シリーズの中の別の一枚は新潟近  
美に収められているので、ご存じの  
方も多であろう。

さて、館に到着したわたしの朝は  
「ボン・ジュール」「サヴァ？」と  
会う人ごとに挨拶と握手をすること



から始まる。(日本人なのでキスは  
免除)美人秘書や監視の紳士たちを  
合わせても20人程度の小さな美術館  
だからこそ、アットホームな雰囲気  
である。今のところ月曜から金曜  
まで(夕方は5時に終わる)館にい  
るが、やっていることは館長をはじ  
めとするマダムたちから回ってくる  
調べものをしたり、講演会や大学の  
授業を聴講しに行ったり、と比較的  
のんびりとしたものである。少なく  
とも日本にいた時の、一分を争うよ  
うな余裕の無い日常とはかけ離れて  
いる。もちろんそれはわたしが言葉  
もままならない海外からの研修生だ  
からであって、他の職員は当然みな  
忙しい。そのせいか、ときには購入  
候補作品の調べなどの仕事をする  
こともある。「猫の手」というわけ

なのであろう。

現在その半分を終えてみて、一年  
間という研修期間は当初考えていた  
よりも長いものではない、という印  
象がある。もっとも更に長く持ち場  
を離れることも現実的には難しいで  
あろうが、いずれにしてもこれまで  
は国立以外の美術館では実現が困難  
であった〈学芸員の在外研修〉に形  
が与えられたわけで、この制度が各  
地の学芸員の置かれた状況を少し  
も動かしていく何らかのきっかけと  
なっていくって欲しいと切に願っている。

もう一つ、心から望んでいるもの  
に、とろけるように美味しいお寿司  
とそれに添えられた銘酒があるが、  
こればかりは……。帰国の日もや  
っぱり待ち遠しい。

(1995.2.11. Samedi)

## ■表紙作品解説 クロード・モネ《コロンプの平原、霜》

1871年から78年にわたるモネのアル  
ジャントゥイユ時代は印象主義の  
高潮期にあたり、ルノワールやマネ  
が同地に彼を訪れ相互に影響しあ  
いました。モネはこの作品の制作と同  
じ1873年、印象派命名のきっかけと  
なった《印象、日の出》を制作し、  
翌年の第1回印象派展に出品してい  
ます。

この作品はアルジャントゥイユの  
対岸ジュヌヴィリエからコロンプの  
平原を見渡して描かれています。雪  
の消えた春先の大気が表現され、画  
面下を大きく占める霜のおりた地表  
にも印象主義的な色彩と筆触の萌芽  
がみられます。また、背景に描きこ  
まれているブゾンの町の煙突の煙は、  
機関車や鉄橋といったようなモチ

フを作品にとり入れた画家の、当時  
の産業化・近代化に対する関心を示  
しています。



1873年 油彩・キャンバス 52.5×72.0cm

# 平成7年度の催し

## 企画展

- 4月14日(金)～5月28日(日) **ヨーロッパ工芸新世紀展 素材への挑戦・手技の復活**  
 ガラス、金属、木、布、ジュエリー……。様々な素材の未知の魅力を引き出し、斬新で芸術性豊かな作品を生み出しているヨーロッパ12ヵ国27作家の、約130点の工芸作品を紹介します。
- 8月15日(火)～9月17日(日) **子どものための美術展 美術の光・光の美術**  
 子どもたちに楽しく美術に親しんでもらうための展覧会です。美術の重要な要素である「光」をテーマに、印象派から現代のライトアートまで、光を扱った美術作品を楽しくわかりやすく紹介します。
- 9月23日(土)～10月22日(日) **大正期の日本画 金鈴社の五人(仮称)**  
 鍋木清方、吉川雲華、結城素明、平福百穂、松岡映丘の5人は、大正時代に自由な研究、個性の表現を目的として日本画の研究団体金鈴社を結成しました。この5人の個性豊かな作品を展示し、大正期における近代日本画の一つの側面を紹介します。
- 平成8年 2月9日(金)～3月24日(日) **表現主義彫刻 ドイツ現代美術へのプロローグ 1890-1920**  
 表現主義は今世紀始めの重要な芸術運動のひとつですが、実際の作品が展覧会で取り上げられる機会は多くありませんでした。そこでこの展覧会では、海外の著名な美術館から協力を得て、表現主義芸術の優れた作品を、彫刻を中心に紹介します。



松岡映丘 (さつきまつ浜村) 1828年



エルンスト・バルラッハ (再会(キリストとトマス)) 1925年

## 常設展

(9月18日(月)～9月21日(木)、平成8年3月28日(水)～4月1日(月)は保守点検のため休館します。)

- |   |  |
|---|--|
| 第1期 ■ 4月1日(土)～6月25日(日)<br>前期: 4月1日(土)～5月14日(日)<br>後期: 5月16日(火)～6月25日(日)       | 展示室1 新収藏品と日本画の逸品<br>展示室2 新収藏品を中心に<br>展示室3 前期:新収藏品を中心に 後期:ヨーロッパ風景 街と村           |
| 第2期 ■ 6月27日(火)～9月17日(日)<br>前期: 6月27日(火)～7月30日(日)<br>後期: 8月1日(火)～9月17日(日)      | 展示室1 <海・川>を描く<br>展示室2 光の絵画<br>展示室3 前期:牛腸茂雄"SELF AND OTHERS"(新収蔵) 後期:光とさまざまなかたち |
| 第3期 ■ 9月22日(金)～12月24日(日)<br>前期: 9月22日(金)～11月12日(日)<br>後期: 11月14日(火)～12月24日(日) | 展示室1 岩田正巳 本画と下絵<br>展示室2 特集展示 小野末<br>展示室3 前期:'60年代の美術 I 後期:ゴヤ 戦争の惨禍             |
| 第4期 ■ 平成8年 1月4日(木)～3月27日(日)<br>前期: 1月4日(木)～2月18日(日)<br>後期: 2月20日(火)～3月27日(日)  | 展示室1 特集展示 横山操<br>展示室2 特集展示 竹谷富士雄<br>展示室3 前期:亀倉雄策のデザインII 後期:ドイツ表現主義の時代          |

## 新潟県民会館ギャラリーでの企画展

- 9月29日(金)～10月17日(火) 中国現代絵画名作展
- 平成8年3月2日(土)～3月20日(木) シリーズ新潟の美術'96

## 美術館友の会からのお知らせ

### ●「友の会」会員募集

友の会は美術を受取る人が集まり、鑑賞会や研究会、会報発行などの活動を通じて親睦を深め、美術館を支援する団体です。

平成7年度の会員の有効期間は平成7年4月1日から平成8年3月31日まで。入会すると、常設展の無料観覧や企画展の無料観覧券の配布、図録やレストランの割引、会報等の配布や研修行事への参加などの特典があります。年会費は右記の通りです。詳細や入会のお申し込みは、新潟県立近代美術館友の会事務局にお問い合わせください。

[TEL. 0258-28-4111]

### 年会費

- ・一般会員一般 4,000円
- ・一般会員学生 2,000円
- ・ファミリー会員 10,000円
- ・特別会員個人 30,000円(一口)
- ・特別会員法人 30,000円(一口)

### ●平成7年度事業予定

- ・第1回友の会海外研修旅行 [フランス・イタリア方面]
- ・第2回友の会研修旅行 [国内] (昨年度は山梨県立美術館を中心に鑑賞しました。)
- ・各企画展ごとの友の会鑑賞会
- ・美術館探訪 (美術館の舞台裏を紹介します)
- ・友の会たより発行 他

### 利用案内

- 開館時間 / 午前9時～午後5時
- 休館日 / 毎週月曜日  
 ただし祝日・振替休日の場合は翌日が休館となります。  
 ※ 9月18日(月)～9月21日(木)、平成8年3月28日(水)～4月1日(月)は保守点検のため休館します。
- 観覧料金 / ・企画展観覧料  
 企画展によって観覧料が異なります。なお、常設展観覧料で、常設展もご覧いただけます。  
 ・常設展観覧料  
 一般……400円(320円)  
 大学・高校生……200円(160円)  
 中学・小学生……100円(80円)  
 ※ ( )内は20名以上の団体料金です。

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART  
**新潟県立近代美術館**  
 新潟県長岡市宮岡町字居掛278-14 〒940-21  
 TEL.0258-28-4111(代) FAX.0258-28-4115

# 美術連話(4) 「版画の用紙」

新潟県立近代美術館長 前川 誠郎

四月から展示を予定している平成6年度の新収作品の中に、二点の西洋木版画がある。アルブレヒト・デューラー (1471-1528) の《絵入り黙示録 Apocalypsis cum figuris》(1511年)と、ヤーコボ・デ・バルバリの《ヴェネツィア鳥瞰図》(1500年)である。《黙示録》は表紙絵一点を除くと1498年に完成し発売された。また《鳥瞰図》は関係文書に照らして制作に三ヶ年を要したことが分るので、片やニュルンベルク、片やヴェネツィアで両者はほぼ同時進行していたことになる。《鳥瞰図》の企画と販売に当たったのはヴェネツィアで活動していたニュルンベルク出身の商人アントン・コルプで、この人の名はデューラーが1506年にヴェネツィアから友人のヴィリバルト・ビルクハイマーへ宛てて書いた十通

の手紙の中に二回見えている。面白いのはヴェネツィアには腕の良い画家が沢山いると報じたあとで、コルプの意見ではヤーコボ親方より秀れた画家はいないということだと伝え、しかし本当に上手なら、何もドイツまで行かないで当ヴェネツィアにいる筈だと彼を諷する人もいと付け加えていることである。このヤーコボ親方が即ちヤーコボ・デ・バルバリ (1450ころ-1515/16年)で、彼が《鳥瞰図》の下絵を描いたであろうとされるのは、《鳥瞰図》の上方中央に浮ぶ雲に乗ったマーキュリー神が左手に持つ杖の飾りが他のヤーコボの作品——その多くは小さい銅版画——の中にもトレードマークとして見出だされるからである。ヤーコボはこの絵地図が刊行された1500年にはすでにドイツへ来て、皇帝マク

シミリアンの御用絵師になっている。

《黙示録》と《鳥瞰図》はともにその彫版技術の卓抜なことで観る人々を驚かせる。《黙示録》の中で都市の遠望を描いた第十四図「深淵の鍵をもつ天使」を《鳥瞰図》のヴェネツィア市街と較べてみると、そこには、一脈相通うものがあり、当時のヴェネツィアの木版挿絵の様式とは大差がある。そこでこの《鳥瞰図》はイタリアで開発されて、大航海時代を可能とした測量術や遠近法に基いて作られた下絵を、ドイツ、それもニュルンベルクから招かれた彫師たちの手で製版したものと考えるのが定説になっている。

当館の《鳥瞰図》は六枚の版木のそれぞれを二枚の紙に刷っているので計十二枚一組からなる。版木一枚の大きさはおよそ70×100cmであるから、紙一枚は70×50となる計算である。ところで《黙示録》十六枚の版型は平均して39×28であるので、絵だけならば《鳥瞰図》に使われた70×50の紙を半分に切った50×35の大きさの紙に刷れることになる。しかしデューラーは《黙示録》を対向ページにテキストをつけた書物として売ったので、その場合は《鳥瞰図》の一枚と同じ70×50を用い、右に版画、左にテキストを刷ったのである。この70×50の紙型を全紙(ボーゲン)と言い、当時は最大の紙であった。

ところで驚くべきは大英博物館蔵の《鳥瞰図》の初版は版木一つを一枚の紙に刷っているのも、その紙型は版木と同じ70×100となり、ボーゲンの倍大である。よくそのような大きな紙があったものである。デューラーの『ネーデルラント旅日記』(1520-21)の終わり方にレガールボーゲン(王判紙)というのが出てくるが、それであろうか。



ヤーコボ・デ・バルバリ(ヴェネツィア鳥瞰図(第3版)) 部分